

# 『江都督納言願文集』における「姑射」の用法

—平安前・中期漢詩文との比較を通して—

馬 耀

## はじめに

大江匡房作願文の集大成である『江都督納言願文集』は、一二〇篇以上の願文を集録している。それらの願文の中には漢籍を出典とする表現が多く用いられており、たとえば、「有虞帝之至聖也、遂告<sub>レ</sub>別於九疑之雲<sub>〔一〕</sub>」（巻一「後三条院五七日御願文」）や「往而不<sub>レ</sub>反、梧岫登空之霞忽銷<sub>〔二〕</sub>」（巻一「堀河院旧臣結縁経供養願文」）がその類である。この二つの表現には、『史記』五帝本紀などに記される中国伝説上の有徳の帝、舜の故事が用いられている。前者は舜が葬られた「九疑」山を、後者は舜が亡くなった地、蒼梧に因んだ「梧岫」を引き合いに出し、それぞれ後三条院と堀河院を舜になぞらえて、その死を悼んだ表現である。『江都督納言願文集』における漢籍を出典とする表現の中には、神仙と関連する語が数多く存在する。その一つが、『莊子』（逍遙遊）にある次の記述を出典とする「姑射」である。

藐姑射之山有<sub>二</sub>神人居<sub>一</sub>焉。肌膚若<sub>二</sub>冰雪<sub>一</sub>、淖約若<sub>二</sub>処子<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>食<sub>二</sub>五穀<sub>一</sub>、吸<sub>レ</sub>風飲<sub>レ</sub>露。乘<sub>二</sub>雲氣<sub>一</sub>、御<sub>二</sub>飛龍<sub>一</sub>、而遊<sub>二</sub>乎四海之外<sub>一</sub>。

右の出典において、神仙が住む場所を意味する「藐姑射之山」は、「姑射」もしくは「射山」「姑山」などの形として（便宜上、以下ではすべて「姑射」と総称する）、『江都督納言願文集』の二十二篇の願文において見られる。しかし、その二十二箇所の「姑射」は、本来の意味で用いられる例は一つもなく、すべてがもとの意味から転じた比喻表現として使われている。

これらの比喩的な使い方は、日本漢詩文史上において、どの時点から発生したものであるか。この疑問を解き明かすため、本稿では、まず、『江都督納言願文集』における「姑射」の意味を分類し、そのうえで、上代からの漢詩文における「姑射」の意味について考察する。その考察を通じて得た結果を踏まえ、『江都督納言願文集』における「姑射」の用例と照らし合わせながら、『江都督納言願文集』における「姑射」の受容の仕方を明らかにしたい。

一 『江都督納言願文集』における「姑射」の用例

冒頭において述べたように、「姑射」は『江都督納言願文集』の二十二篇において見いだされる。その二十二箇所を作成時期の順に列挙すると以下のようになる。

①幽閑有<sub>レ</sub>心、忽<sub>レ</sub>棄<sub>二</sub>脱履<sub>一</sub>於姑射之山、幻泡厭<sub>レ</sub>世、更逐<sub>二</sub>虚舟<sub>一</sub>於菩提之海。

(一一)後三条院五七日御願文・延久五年(一一〇七三)

②姑射山之雪、送<sub>二</sub>万劫<sub>一</sub>而弥明。無何郷之雲、歷<sub>三</sub>三祇<sub>二</sub>而更靜。

(六一)一五但馬守高階為章毘沙門堂供養願文・寛治三年(一一〇八九)

③氷雪弥清、姑射之山常霽、煙霧不<sub>レ</sub>犯、無何之郷長閑。

(二二)白河院熊野山多宝塔供養願文・寛治五年(一一〇九二)

④仰願、以<sub>二</sub>此善根<sub>一</sub>、普皆廻向。汾水之遊、波浪不<sub>レ</sub>起。姑射之柴、日月不<sub>レ</sub>傾。

(二一)四白河院橋寺供養願文・寛治五年(一一〇九二)

⑤今上陛下禁闈之中、撫<sub>二</sub>瑤圖<sub>一</sub>而契<sub>二</sub>千秋<sub>一</sub>。禪定仙院射山之上、計<sub>二</sub>宝算<sub>一</sub>而期<sub>二</sub>万歲<sub>一</sub>。

(三一)九自料天満宮安樂寺堂供養願文・康和二年(一一〇〇〇)

⑥以<sub>二</sub>此功德<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>廻<sub>二</sub>施金輪聖王禪定仙院<sub>一</sub>。鳳掖風芳、姑射雪潔。

(二一)一五白河天皇女御道子九条堂丈六阿弥陀像供養願文・

康和四年(一一〇二二)

⑦金輪聖王禪定仙院、參天兩地之化、鳳掖之雲長閑。木父金母之齡、姑山之雪更潔。

(三一)二〇自料宇佐宮新堂供養願文・康和四年(一一〇二二)

⑧含元殿之中、日月不<sub>レ</sub>傾、藐<sub>二</sub>姑射之上<sub>一</sub>、氷雪永潔。

(六一)一七醫師惟宗俊則堂供養願文・康和四年(一一〇二二)

⑨禪定仙院、金輪聖主、弥潔<sub>二</sub>雪膚<sub>一</sub>於姑射、久保<sub>二</sub>日角<sub>一</sub>於鳳掖。

(三一)一五自料仁和寺般若寺供養願文・康和五年(一一〇三三)

⑩姑射雲底、仰<sub>二</sub>黃軒<sub>一</sub>而夙夜日深。博望月前、亞<sub>二</sub>綺里<sub>一</sub>而鬢髮霜重。

(三一)二三修理大夫顯季卿仁和寺九体阿弥陀堂供養願文・長治元年(一一〇四四)

⑪象闕之月、争<sub>二</sub>乾坤<sub>一</sub>而共懸。姑射之水、論<sub>二</sub>金石<sub>一</sub>而弥潔。

(二一)一四白河天皇女御道子九条堂供養願文・嘉承元年(一一〇六六)

⑫射山之風雪長靜、寿域之春秋無<sub>レ</sub>疆。

(一一)一五興福寺最勝院供養願文・嘉承二年(一一〇七〇)

⑬至孝不<sub>レ</sub>修之悲、顧<sub>二</sub>姑射<sub>一</sub>而遺恨。克<sub>二</sub>己復<sub>一</sub>礼之行、到<sub>二</sub>仏国<sub>一</sub>有何疑。

(二一)一六堀河院中陰仏事追善供養願文・嘉承二年(一一〇七〇)

⑭轡車不<sub>レ</sub>帰、姑山之雲忽慘。鸞輿晏出、后庭之露猶滋。

(一一)一八堀河院周忌追善供養願文・嘉承三年(一一〇七八)

⑮姑射之上、汾水之陽。寿如<sub>二</sub>南山<sub>一</sub>、学<sub>二</sub>赤松<sub>一</sub>而伴<sub>二</sub>白石<sub>一</sub>。齡同<sub>二</sub>西母<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>地仙<sub>一</sub>而將<sub>二</sub>谷神<sub>一</sub>。

(一一)一六法勝寺北斗曼荼羅堂供養願文・天仁二年(一一〇八九)

⑯姑射之辺、仙院之地、氷顔玉体、送<sub>二</sub>千秋<sub>一</sub>而弥潔。蓬萊崆峒、歷<sub>二</sub>万劫<sub>一</sub>而永堅。

(二一)一九一品経結縁供養願文・天仁二年(一一〇八九)

①⑦ 射山之上、汾河之陽。滕理無<sub>レ</sub>變、風水弥和。

(一一二〇) 鳥羽天皇日吉社仁王經供養願文・天仁二年(一一〇九)

①⑧ 無何有之郷、藐姑射之嶺。王母仙桃之三千年、羞<sub>二</sub>於旦朝<sub>一</sub>。  
龍智闍梨之七百歳、視如<sub>二</sub>兒子<sub>一</sub>。

(一一一八) 白河院成菩提院三重宝塔供養願文・天仁二年  
(一一〇九)

①⑨ 以此功德、上獻<sub>二</sub>鳳闕<sub>一</sub>、更<sub>二</sub>資<sub>二</sub>姑山<sub>一</sub>。保<sub>二</sub>万歳之寿福<sub>一</sub>、  
致<sub>二</sub>四海之太平<sub>一</sub>。

(六一三) 藤原為房朝臣甘露寺修善供養願文・天仁三年  
(一一一〇)

②⑩ 又奉<sub>レ</sub>祈禪定仙院。広莫之野、毎<sub>レ</sub>春之臨幸無<sub>レ</sub>疆。姑射之  
山、歴<sub>レ</sub>劫之寿福不<sub>レ</sub>測。

(一一一五) 清水八幡御塔供養願文・天永元年(一一一〇)

②⑪ 又奉<sub>レ</sub>資禪定仙院。億齡億齡、再陳者志之切也。万劫万劫、  
重言者望之深也。一事一物、出<sub>二</sub>於射山之風塵<sub>一</sub>。公云私云、  
成<sub>二</sub>於汾水之渥沢<sub>一</sub>。

(六一一六) 総権介佐藤李清紀伊国毘沙門堂供養願文・天永  
元年(一一一〇)

②⑫ 金紫成<sub>レ</sub>行、綺羅撲<sub>レ</sub>地。以照<sub>二</sub>藐姑射之嶺<sub>一</sub>、以耀<sub>二</sub>無何有之  
郷<sub>一</sub>。

(一一一九) 白河院六十御賀(擬作)・天永三年(一一二二)

この二十二条の「姑射」を、大まかに分けると表一のように、  
場所を表すものと人を表すものに区別できる。

表一

場所を表す「姑射」	人を表す「姑射」
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒	⑬ ⑰ ⑲

つまり、この二十二条の中、⑬と⑲以外の「姑射」は、すべて場所を表すものである。もともと、原典『莊子』における「姑射」も、神仙の住む場所を表すものであった。しかし、表一の上段は、原典の意味で用いられている「姑射」は一つもなく、いずれも本来の意味から派生した場所を比喩的に表すものである。例を挙げると、①の「姑射」は後三条院が退位することを言い表すものであり、「現世での理想郷」という意味に解釈できる。②⑫の「姑射」は「院御所」をたとえた言い方である。白河院を表す⑬と⑲の「姑射」は、場所である「院御所」から、その場所にいる人、すなわち上皇という意味に転じたものと思われる。また、「院御所」を表す「姑射」の用例をさらに、②⑫のような単純に「院御所」という場所を表すものと、⑤のような、「院御所」を表すと同時に、対句全体の文脈において院の長寿もしくは安泰を祈願するものと、②⑪のような院の恩恵を表すものに細分化できる。その細分化した二十二条の「姑射」の意味を表二にまとめることができる。

表一

理想郷	現世での
①	上皇
⑬ ⑭	院御所
② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳	院の長寿・安泰
㉑	院の恩恵

表二に見える「姑射」の意味は、全部で五種類あるが、いずれも比喩的に使われるものである。これらの用法は、『江都督納言願文集』独自のものであるか、それともそれ以前の漢詩文から踏襲したものであるか、以下では上代より平安前・中期までの漢詩文集から用例を拾い上げ、文体で詩と願文とそれ以外に分けて、「姑射」の意味について考える。

## 二 詩における「姑射」の用例

「姑射」の用例は日本最古の漢詩集である『懷風藻』にすでに次の三例が見られる。

五言。春日、応詔。二首。(其二) 巨瀬多益須  
①姑射通太寶、崆峒索神仙。豈若聽覽隙、仁智寓山川。

五言。鳳、從吉野宮。一首。

②鳳蓋停南岳、追尋智与仁。(中略)此地仙靈宅、何須姑射倫。

紀男人

(七三)

五言。從、駕吉野宮。一首。

高向諸足

③誰謂姑射嶺、駐蹕望仙宮。

(二〇二)

①と②は両方とも、「子曰、智者樂水、仁者樂山、智者動、仁者靜、智者樂、仁者壽」(『論語』(雍也))を踏まえているものである。神仙境である「姑射」や「崆峒」に神仙を求めるよりも、天子が政治を行う余暇に、仁と智の心を山水に寄せることを称揚する①に対して、②と③は「姑射」を引き合いに出し、吉野宮のすばらしさを謳歌するものとなっている。

右の三例は、讀える対象に、山水に心を寄せる行為と目の前にある吉野宮との区別があるものの、いずれも比較の手法として「姑射」を持ち出している。①と②③における「姑射」はすべて『莊子』(逍遙遊)の原義で用いられているものである。

詩の用例は『懷風藻』のほかに、『文華秀麗集』にも見られる。

奉和、詠春雪。一首。

滋野貞主

④詠春雪、雪影翻翻暗四隣。姑射遙聞一処子、王門時見五車輪。

(卷下・雜詠・一二七)

前引した『莊子』(逍遙遊)に、「雪」を使って神仙の肌を形容する「肌膚若氷雪」という表現がある。④は、雪を描写する詩句を導き出すために、この表現を踏まえて、「姑射」を用いている。ここでの「姑射」は「処子」と対応して、原典『莊子』のものとの意味が踏まえられている用例である。

『懷風藻』と『文華秀麗集』における「姑射」は、いずれも本来の意味で用いられているのに対して、『菅家文草』ではそれらと異なる意味となっている。

三月三日、同賦「花時天似<sup>レ</sup>醉、応<sup>レ</sup>製。并<sup>レ</sup>序。

⑤帝堯姑射華顔少、不<sup>レ</sup>用紅勻上<sup>レ</sup>面來。  
(卷第五・三四二)

右は「三月三日、同賦「花時天似<sup>レ</sup>醉、応<sup>レ</sup>製。并<sup>レ</sup>序」詩の尾聯である。同詩の序とともに、「和漢朗詠集」(卷上・春)に収められる領聯、「煙霞遠近<sup>レ</sup>応<sup>レ</sup>同戸、桃李淺深<sup>レ</sup>似<sup>レ</sup>勸益」は人口に膾炙する名句として知られる。尾聯の「帝堯」は、中国の古の聖天子堯のことであり、ここでは宇多天皇を堯になぞらえた言い方である。「姑射」は天皇のいる宮中をたとえたものと思われる。

このように、詩における「姑射」は、本来の意味と天皇の住居を指すという二つの場合で使われているのである。

### 三 文における「姑射」の用例

文における「姑射」の古い用例は、『性靈集』に求めることができる。

献<sup>二</sup>梵字并雜文<sup>一</sup>表一首

①龍瑞紀<sup>レ</sup>官、永豫<sup>二</sup>姑射<sup>一</sup>。鳳祥名<sup>レ</sup>職、放<sup>二</sup>曠金閣<sup>一</sup>。  
(卷第四・二八)

献<sup>二</sup>東太上李邑書迹<sup>一</sup>表

②謹以<sup>二</sup>桑門之秘迹<sup>一</sup>、敢奉<sup>二</sup>献姑射之遊目<sup>一</sup>。

(卷第四・三二)

①は空海が嵯峨天皇に献じた表の中に仕立てられた隔句対であり、この「姑射」は「金閣」とともに天皇の住居を表す。

②は題にある「東太上」からも分かるように、この表が献上さ

れた時、嵯峨天皇はすでに上皇になっていたのである。また、「姑射」の後に動作性を表す「遊目」があるので、②の「姑射」は上皇そのものを指していることが明白である。これで、『性靈集』における「姑射」の用例は天皇の住居と上皇そのものを指すものであることが分かった。

『性靈集』の次に見られる文における「姑射」の用例は、『本朝文粹』までくだることとなる。詩の用例が確認できた『菅家文草』に、文の用例がないことは意外な事実である。

『本朝文粹』の用例は次のように、詩序に集中している。

就<sup>二</sup>花枝<sup>一</sup>応<sup>レ</sup>製

田達音

③夫難<sup>レ</sup>遇者聖主也、易<sup>レ</sup>失者花時也。姑射月明、粧樓香飛。臣等何幸事得<sup>二</sup>兩兼<sup>一</sup>。  
(卷第十・詩序・木・二九四)

九日後朝侍<sup>二</sup>宴朱雀院<sup>一</sup>同賦<sup>二</sup>秋思入<sup>二</sup>寒松<sup>一</sup>応<sup>二</sup>太上皇製<sup>一</sup>

紀納言

④薛羅在<sup>レ</sup>眼、如<sup>レ</sup>登<sup>二</sup>姑射之山<sup>一</sup>。水石隨身、疑<sup>二</sup>尋<sup>二</sup>崆峒之頂<sup>一</sup>。

(卷第十・詩序・木・二八七)

春日同賦<sup>二</sup>隔<sup>二</sup>花遙勸<sup>一</sup>酒<sup>一</sup>応<sup>二</sup>太上皇製<sup>一</sup> 菅輔昭

⑤糸竹間奏、咸陽<sup>二</sup>泉之地自清<sup>一</sup>。觴詠不<sup>レ</sup>休、貌姑射之山欲<sup>レ</sup>曙。

(卷第十・詩序・木・二九八)

暮春同賦<sup>二</sup>落花乱<sup>一</sup>舞衣<sup>一</sup>各分<sup>二</sup>一字<sup>一</sup>応<sup>二</sup>太上皇製<sup>一</sup>

後江相公

⑥於<sup>レ</sup>是遠尋<sup>二</sup>姑射之岫<sup>一</sup>、誰<sup>レ</sup>伝<sup>二</sup>鶯歌<sup>一</sup>。亦問<sup>二</sup>無何之郷<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>奏<sup>二</sup>蝶舞<sup>一</sup>。  
(卷第十・詩序・木・三〇六)

③の「姑射」は場所を表すものであり、題に「応<sup>レ</sup>製」という字面もあるので、①の『性靈集』と同じく、天皇の住居を表

すものである。『菅家文章』にある同題の詩は、寛平四年の作とされているため、③の「姑射」は宇多天皇の住居を指すものと思われる。④は宇多上皇御所の景色を神仙境の「姑射」と「嵯峨」にたとえたもので、前節で見た「懷風藻」の用例と同様の使い方をしており、ここでの「姑射」は、「莊子」にある本来の意味で使われているものと思われる。⑤と⑥は、朱雀上皇の住居で催される宴会の場において作成されたものであるため、両方とも上皇の御所を「姑射」にたとえたものである。『本朝文粹』にいたって、『性靈集』の天皇の住居と上皇そのものを指す用法に加え、「上皇の御所」という意味が新たに現れたのである。

「姑射」と上皇との関連について、すでに山本真吾氏、渡辺秀夫氏と李育娟氏の論考がある。中でも特に李氏の論考は、上皇および院御所と「姑射」との結びつきが日本特有のものとする山本氏と渡辺氏の主張に対し、唐文に用例があることを示したうえで、「上皇を神仙に見立てる手法や、「藐姑射」と結びつける趣向」は、「唐代の作品から摂取した」ものであることを明らかにした。李氏の指摘によれば、「姑射」の多様な用法が中国にすでにあったこととなる。

#### 四 願文における「姑射」の用例

続いて、願文における「姑射」の用例について見る。「姑射」が用いられている願文は、主に『性靈集』と『本朝文粹』に見られ、それぞれ四例がある。まず、『性靈集』における願文の

用例を挙げる。

奉<sub>レ</sub>為桓武皇帝<sub>・</sub>講<sub>・</sub>太上御書金字法華<sub>・</sub>達嘽

①太上天皇、超然守<sub>レ</sub>一、姑射忘<sub>レ</sub>帰、脱躡谷<sub>・</sub>神、汾河盤<sub>・</sub>楽。

(巻第十六・四五)

右將軍良納言為<sub>・</sub>開府儀同三司左僕射<sub>・</sub>設<sub>・</sub>大祥齋<sub>・</sub>願文

②太上天皇、藐山逸<sub>・</sub>楽、契久<sub>・</sub>桃椿、汾河盤<sub>・</sub>興、期永<sub>・</sub>芥石<sub>・</sub>一。

(巻第六・四八)

荒城大夫奉<sub>レ</sub>造<sub>・</sub>幡上仏像<sub>・</sub>願文 一首

③瓊糧吐<sub>・</sub>故<sub>・</sub>城<sub>・</sub>遶<sub>・</sub>射<sub>・</sub>而盤桓<sub>・</sub>馭鶴策<sub>・</sub>風、都<sub>・</sub>大羅<sub>・</sub>而跋扈。

(巻第七・六一)

被<sub>レ</sub>修<sub>・</sub>公家仁王講<sub>・</sub>表白 一首

④太上天皇、姑射之遊、与<sub>・</sub>八仙<sub>・</sub>無<sub>・</sub>極<sub>・</sub>襄城之德、千葉流<sub>・</sub>其芳。

(巻第八・八四)

①②④の「姑射」は、いずれも願意を述べる部分に位置しており、「楽」もしくは「遊」という文字と結び付くことが特徴である。①は上皇の安楽な生活を祈るものであって、②と④は、この安楽な暮らしがいつまでも続くようにという意味も含んでいる。対して、③は、神仙の超然とした様を描く願文の冒頭部分に位置しており、本来の意味で用いられている。

そもそも、①②④の「姑射」の意味は、「院御所」という解釈もできない。しかし、これらの「姑射」は三つとも「院御所」という単純な意味ではなく、嵯峨上皇の退位後の境地について言うものである。単なる場所にとどまらず、その場所にいる人物の境地を表す「姑射」を、「院御所」より「上皇の安楽な生活」と解釈した方が、「姑射」が持つ広汎な象徴的な意

味が理解できると考え、①②④の「姑射」を「上皇の安楽な生活」と解釈する。

次に、『本朝文粹』における願文の用例は以下の通りである。

陽成院四十九日御願文 後江相公

⑤ 姑射山之上、送<sub>レ</sub>八十年之春風。功德林之中、迎<sub>レ</sub>四八相之秋月。  
(卷第十四・願文下・追修・四一二) 後江相公

⑥ 射山計<sub>レ</sub>日、虬箭頻移。鼎湖隔<sub>レ</sub>雲、漏水屢滴。  
(卷第十四・願文下・追修・四一三) 後江相公

同院 (朱雀院) 周忌御願文 後江相公

⑦ 我上皇九重之居非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>貴也、豈若<sub>レ</sub>姑射之幽閑。四海之家未<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>貧也、豈若<sub>レ</sub>真如之寂靜。  
(卷第十四・願文下・追修・四一四) 後江相公

円融院四十九日御願文 菅相公輔正

⑧ 泡山可<sub>レ</sub>厭、忽尋<sub>レ</sub>姑山之幽邃。苦海將<sub>レ</sub>救、遂入<sub>レ</sub>仏海之清虚。  
(卷第十四・願文下・追修・四一五) 菅相公輔正

⑤の「姑射」は、陽成院が八十年の人生を送った場所とされており、「現世での理想郷」という意味に解釈できる。⑥は朱雀院が逝去して残された人々の悲しみを言うものであり、ここでの「姑射」は「院御所」を指すものか。⑦と⑧はそれぞれ朱雀院と円融院が天皇の位から退くことを言うものであり、⑤と同じく、「姑射」は「現世での理想郷」にたとえられている。

ここまで見てきた「姑射」の意味を、次の表三にまとめることができる。

表三

『懷風藻』 『文華秀麗集』	『性靈集』 (表)	『性靈集』 (願文)	『菅家文章』 (詩)	『本朝文粹』 (詩序)	『本朝文粹』 (願文)
本来の意味	天皇の住居 上皇	本来の意味 上皇の安楽な生活	天皇の住居	本来の意味 天皇の住居 院御所	現世での理想郷 院御所

「姑射」という語は、『懷風藻』と『文華秀麗集』では、本来の意味でしか使われていない。これは、初期の詩作における原典『莊子』の影響が色濃く残るためであろう。『性靈集』になると、本来の意味以外、天皇の住居と上皇、および供養願文の願意部分に用いられる上皇の安楽な生活を祈る意味が新たに現れる。その中の天皇の住居を表す用法は、『菅家文章』と『本朝文粹』に継承される。『菅家文章』には「姑射」の用例が一つしかないため、天皇の住居以外の用法は当然見られない。『本朝文粹』にいたると、従来の、本来の意味と天皇の住居を表す用法に、「院御所」と「現世での理想郷」という意味が新たに加わるようになった。「現世での理想郷」という意味は、主に院が逝去した追善願文において、その退位を描く部分に用いられる。「陽成院四十九日御願文」はその初見であり、「朱雀院周忌御願文」と「円融院四十九日御願文」がそれに続く。前二篇の作者が大江朝綱であることに留意したい。「院御所」という意味については、詩序と願文における用例はいずれも朱雀院の

御所について言うものであり、その中の二篇は大江朝綱の作である。

## 五 『江都督納言願文集』における「姑射」の用法

次は、『江都督納言願文集』の意味について、表三のものと照らし合わせながら、表二の項目順にしたがって見る。

表二の「現世での理想郷」という意味がもつとも早く現れたのは、『本朝文粹』における大江朝綱作の願文である。『本朝文粹』において、この意味を表す「姑射」は追善願文の、亡くなった院が天皇の位から退く場面を描く部分に登場する。表二①の「姑射」も、それと同様の使い方である。この部分は、『王沢不渴抄』の追善願文の十番構成で言えば、二番の「聖霊平生存生之様」にあたる。

二段目の「上皇」を指す用例は⑬と⑭である。「上皇」を指す「姑射」は『性霊集』にも用例があったが、⑭はそれと同じく、「姑射」を「上皇」に置き換えることができ、いわば換喩的な使い方である。ここで注目したいのは⑬の用例である。⑬は①と同じく追善願文であり、「姑射」は十番構成の五番「悲嘆事」にあたる部分にあり、故堀河院の父院白河院を指す。追善願文において、「姑射」を逝去した院ではなく、存命中の院に用いるこの用例は特殊の使い方と言える。

次の「院御所」を表す用法は、『本朝文粹』から受け継いだものと見受けられる。この意味に当てはまる「姑射」も、換喩的な使い方で、「院御所」に言い換えることができる。『性霊集』

の「天皇の住居」を表す用例も大きくはこれと同じである。

四段目の「院の長寿・安泰」については、まずこの意味に当てはまる用例の多さに驚かされる。これらの用例は、前節で見た①②④の「性霊集」の用例と同じく、願意にあたる部分に存する。ただ、「姑射」が「楽」や「遊」という文字と組み合わせられる『性霊集』の用例に対して、『江都督納言願文集』の場合は、「姑射」が「遊・楽」と結合する用例は④のみであり、そのほかの用例においては、「姑射」と組み合わせられる語のほとんどが、③「常」、⑦「更」、⑧⑩「永」、②⑨⑪⑬⑭「弥」、⑫「長」、⑬「無変」といった永遠性を表すものであり、あるいは②「万劫」、⑤「万歳」、⑩「千秋」「万劫」、⑬「三千年」「七百歳」、⑫「歴劫」のように、きわめて長い時間を表す数量詞の類である。『江都督納言願文集』のこのような、単なる「上皇」や「院御所」を表すのではなく、より広汎な意味を「姑射」に持たせた用法は、『性霊集』から受容したものであろう。『性霊集』から継承した「姑射」の用法を、『江都督納言願文集』はさらに広いものに発展させたのである。

「院の長寿・安泰」という意味に関して、『江都督納言願文集』は『性霊集』に比べ、「姑射」と組み合わせる語の範囲がより広くなったという語彙面における特徴があるほか、願主に関するもう一つの特徴も有している。それは、この意味に当てはまる半数ほどの願文の願主が、白河院自身ということである。④を例に挙げると、この願文は冒頭に、「太上天皇〈諱〉敬白」とある。このことから、④の願文は白河院の立場で作成されたことが分かる。そもそも、願文というものは、法会の場におい



て願主の願意を述べる文であるので、白河院が願主を勤めるこの願文は、白河院の立場で作られるのはごく自然なことである。不自然なのは、院自身が願主となっている願文の中で、院自身の長寿・安泰を祈る願意が含まれることである。願意部分に院の安樂な生活を祈る内容を包含する願文は、『性靈集』にすでに見られた。しかし、『性靈集』のそれらの願文は、嵯峨院の立場で書かれたものは一つもない。たとえば、『性靈集』巻六・四五「奉<sub>レ</sub>為桓武皇帝<sub>一</sub>講<sub>二</sub>太上御書金字法華<sub>一</sub>達嘯」の場合、冒頭に「沙門空海聞」とある。この願文が作者である空海の立場で書かれていることを表しており、表二④の願文と好対照になっている。白河院自身が願主となっている願文の中で、院自身の長寿と安泰などの現世における利益を祈る願意は、末法という時代における人々の恐慌した心理を表す一方、院政における白河院の絶大な権力を誇示したものであるのかもしれない。最後に、表二の「院の恩恵」という意味について見る。願主である佐藤季清が、まず、「又奉<sub>レ</sub>資<sub>一</sub>禪定仙院<sub>一</sub>。億齡億齡、再陳者志之切也。万劫万劫、重言者望之深也」というように、白河院の長寿を祈る。「姑射」が見られる「一事一物、出<sub>レ</sub>於射山<sub>一</sub>之風塵」。公云私云、成<sub>レ</sub>於汾水之渥沢」という文は、その後に続く。ここでの「姑射」は「院御所」を意味するが、この一文は、季清が公私にわたる自身のすべてが、白河院の恩恵にあずかるものであると解釈できる。もしこの解釈が間違いでなければ、『江都督納言願文集』において、「姑射」に新たな用法が生まれたことになる。

## おわりに

ここまで見てきたように、「姑射」という語は、初期の漢詩作品において、主に本来の意味で使われていた。本来の意味に加え、天皇の住居や上皇を指す用法と、天皇の位から退いた上皇の境地を表す用法の登場は、空海の作品を待たなければならなかった。これらの用法は唐文にも見られるとの李氏の指摘を踏まえれば、日本におけるこれらの用法の出現は、空海の入唐した経験と不可分な関係にあると考えられる。空海の作品をきっかけに、『菅家文草』には天皇の住居を指す用法が継承され、『本朝文粹』にはさらに、「院御所」と「現世での理想郷」という意味が現れた。

『江都督納言願文集』にいたると、それまでの漢詩文に見られた「姑射」本来の意味が脱落したことに加え、『性靈集』『菅家文草』と『本朝文粹』にある天皇の住居を意味する用法も、ついに姿を現すことはなかった。その一方で、同願文集は、『本朝文粹』から、「院御所」と「現世での理想郷」という意味をしっかりと受け継ぎ、『性靈集』から、「上皇の安樂な生活」を象徴する表現の仕方を継承したうえで、さらに現世における「院の長寿・安泰」という意味に発展させたのである。

以上の考察によって、『江都督納言願文集』における「姑射」の用法について、その受容の様相を垣間見ることができた。院政期になってくると、院と「姑射」の結びつきがより強くなって、そのことは、「姑射」が長寿を表す文言と結び付いて院の長寿・

安泰を表すようになったことに顯著に表れている。長寿を表す言葉と「姑射」が併用される例は、『性靈集』にも見られるが、『性靈集』では両者が結び付いて、上皇の無為超然の境地や安楽な暮らしぶりを表すのに対して、『江都督納言願文集』では、それが院の長寿・安泰を表すようになり、しかも、院自身が願主となっている願文に多用される。それらの願文は、ほとんど白河院政期において作られたことを考慮に入れば、このような表現の変化は、院政期という白河院の権力が全盛した時代とも関わっていると考えられる。

本稿においては、『江都督納言願文集』における「姑射」の用法を中心に考察したが、時間の関係上、中国の詩文作品との比較という視点からの検討はできなかった。また、『江都督納言願文集』以降の受容の様相についても言及する余裕はなかった。『江都督納言願文集』における「姑射」は、用法だけではなく、その対語の種類もそれまでの漢詩文と比べると、豊かになっている。これらの変化は、願文の書かれた立場と願意の変化とも関連していると考え、右の問題点とともに今後の研究課題とする。

## 注

- (1) 『江都督納言願文集』の本文はすべて山崎誠「江都督納言願文集注 解」(瑞書房 二〇一〇)に拠る。ただ、返り点・句読点に関しては、わたくしに訂した箇所がある。
- (2) 王叔岷「莊子校詮」王叔岷著作集 中華書局 二〇〇七。
- (3) 『懷風藻』の本文はすべて小島憲之校注『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(日本古典文学大系六九 岩波書店 一九六四)に拠る。
- (4) 『文華秀麗集』の本文はすべて小島憲之校注『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(日本古典文学大系六九 岩波書店 一九六四)に拠る。
- (5) 川口久雄校注『菅家文章・菅家後集』岩波書店 一九六五。
- (6) 『性靈集』の本文引用はすべて渡辺照宏・宮坂宥勝校注『三教指帰 性靈集』(日本古典文学大系七一 岩波書店 一九六五)に拠る。
- (7) 『本朝文粹』の本文はすべて大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『本朝文粹』(新日本古典文学大系二七 岩波書店 一九九二)に拠る。
- (8) 注(5) 頭注を参照。
- (9) 李育娟「藐姑射に住む上皇像の形成―『莊子』「逍遙遊」における堯帝伝承から」『和漢比較文学』三二 二〇〇四。
- (10) 山本真吾「上皇御所」の呼称(初出『国語学』一五七 一九八八)『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』汲古書院 二〇〇六。
- (11) 渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』勉誠社 一九九一。
- (12) 国文学研究資料館編『真福寺善本叢刊』十二『漢文学資料集』臨川書店 二〇〇〇。十番構成は、一番「四種次第」(世間無常通用儀、孝行儀、仏法讃歎、悲嘆哀傷)、二番「聖靈平生生存之様」、三番「病中之様」、四番「逝去之様」、五番「悲嘆事」、六番「日数事」、七番「修善仏経事」、八番「時節景気事」、九番「昔因縁事」、十番「廻向句事」となっている。